

営みの多様性がもたらす都市住民と自然の関係 -神戸市民と六甲山系から見る具体的共存イメージの重要性-

Relations of city inhabitants and nature which variety of the working brings
Importance of specific coexistence image in the City of Kobe

学籍番号 47-116751
氏名 三木柚香 (Miki, Yuko)
指導教員 鬼頭秀一教授

1. 問題の所在

環境問題が世界のいたるところで議題にあがるなかで、いまだに「自然保護か開発か」という二項対立的な議論が残っている。しかし、環境倫理を中心に、環境社会学分野では、二項対立からの脱却を図り、「人と自然の関係」を捉えなおす試みがなされている。鬼頭秀一は、二項対立図式で環境問題を考える不適切さについて、全体論的な視点の欠如に問題があると指摘する¹。相互的に関係しあっている「人と自然の関係」とは、不可分なかたちで存在しているため、「関係性の複雑さ」を分解することなく捉えなおす必要がある。

近年の環境社会学の分野のなかでの主要議題のひとつに、農村地域における生業や遊び仕事による自然とのかかわりが挙げられるだろう²。それらは、分断された自然と人間の生活を再びつなぐものとして、大きな注目を集めている。

2. 本研究の目的

農村地区や里山だけではなく、都市計画や緑地計画においても、さまざまな視点から人と自然の関係は考えられてきた。生態学や造園学といった分野での研究から、一見すると都会における自然は、人為的に即したかたちで造られたものであると捉えられがちで、またそれが「観念的な自然観」をもたらすものとして、しばしば批判の対象となってきた。本研究では、都市住民の自然観が、観念的であるのかという問題関心を出発点に、緑地計画のなかで深く議論されてこなかった、人と自然の関係における文化的側面、精神的側面の重要性および都市住民が持つ「自然観」がどのように構成され、その地域での営みとつながっているのかを明らかにしたい。

3. 先行研究

鬼頭が提唱する「社会的リンク論」は、「生業」の営みに注目し、自然との関係の在り方について、規範的な構造を明らかに

¹ 鬼頭秀一/福永真弓(編) 2008 『環境倫理学』 東京大学出版 p.11

² 菅豊 2006 『川は誰のものか—人と環境の民俗学』 吉川弘文館、嘉田由紀子ほか(編) 2000 『共感する環境学』 ミルネヴァ書房など

しようとするものである³。『生業』こそ人間と自然とのかかわりそのものであると考え⁴られており、本論文では、その「生業」を広義に捉えることで、都会における営みの多様性を明らかにする。

また丸山康司の北限のサルに関する研究における、都市部における自然保護に対する概念やイメージの構築は、観念的なものであり、自然を具体的に捉えることができていないのではないかという指摘に対し、具体的な事例を用いながら、都市部における自然観の考察を試みる。

都市に多く存在する公園緑地の在り方から、人から自然への働きかけが限定的になり、自然的環境から人への働きかけに具体性が欠けていくことを指摘しながら、「公園緑地」の緑地保全の観点からではなく、都市部における「自然」とはなにかを考察し、「自然」とのかかわりをどのように捉え、評価することができるのかを六甲山系と神戸市民を事例に探っていく。

4. 調査地概要及び調査方法

事例対象地には、兵庫県の県庁所在地である神戸を選定した。面積は、550.53k m²で、兵庫県における専有面積は6.56%となっている。人口は1,542,230人（2012年12月現在神戸市発表）、面積の大半は六甲山系が占めており、市街地の面積は全体の10%程度となっている。山脈が大都市に隣接したかたちで存在し、多様な文化を育んできた神戸に着目することで、「営み」の多様性を見ることができると考えた。

³ 鬼頭（ほか）：2008：p.16

⁴ 鬼頭秀一 1996 『自然保護を問い直す』 筑摩書房 p.116

研究方法は、主に聞き取り調査および文献調査によるものである。主な対象は、六甲山で働く人々や六甲山において生活してきた六甲山居住者、および六甲山のふもとに生活拠点を置く居住者、また京阪神地域から訪れた登山者となっている。

5. 六甲山系について

神戸市は、六甲山系を「都市山」として位置づけ、「文化機能」「環境機能」「生産機能」の3つの機能を持った六甲山系を目指しており、「文化機能」的かかわりと、同時に「環境機能」的かかわりを持つことで、六甲山系への多様な「繋がり」を提供している。また、経済的利益につながらないものであっても、六甲山系で得た自然物から「思い出」や「作品」へ変換していく経験を、六甲山系におけるひとつの有意義な「生産機能」として捉えた。

神戸市民を対象に行われたアンケートから、「公園」に求める「自然」と六甲山系に求める「自然」の関係を考察した結果、神戸市民にとって六甲山系は「公園」ではなく「神戸らしいみどり」の象徴であることが明らかになった。また六甲山系が「景観」としてだけではなく、それ以上の役割を持つものとして捉えられていることから、現在の六甲山系を支えるキーワードとして「オープンさ」を挙げ、その結果、六甲山系に「日常性」と「異日常性」をもたらしていると考察した。それらの往来によって、多様な価値観と営みが生まれていると考えられる。

6. 六甲山系開発の歴史

上述の六甲山系の在り方の礎となった開発は、A・H グループや本多静六、行政と

企業によるものである。それぞれが目指した六甲山系の姿を分析した。グループは、「新しい山の遊び」を、本多は「景観の解放」、行政・企業は、「遊びの選択肢」を提供する者であった。

7. 現在の六甲山系と神戸市民の関係

エドワード・レルフの静的な物質的要素（景観）と人間の活動と経験の意味づけが「場所のアイデンティティ」を構成するという主張に着目し、その場所性をもたらす六甲山観を聞き取り調査から明らかにすることを試みた。

六甲山を職場としている人々は、日常業務において発見される六甲山の自然的環境の変化に関心を持つ。それは景観として眺める六甲山系でなく、「働く場」の環境という、具体的な場所性をもたらしていることが明らかになった。自然的環境と共に変化する来訪者の行動や視線・発見に直接触れ合うこと、ないし発見に導くような交流のなかで、働くことの意義が深められ、かれらの六甲山独自の魅力の発見や働く場としての意義や価値といった「六甲山観」が構成されていくのである。

遊び場としての六甲山系では、さまざまな営みが継承されていく様子を経験することによって、自らの行動や関心が肯定されることの確認していることが明らかになった。

住む人にとっての六甲山系とは、生活の営みの場として存在している。歴史のなかにある「意味の継承」に重きを置いた「住む場所」としての六甲山の創造を期待している一方で、住む場としての六甲山を「み

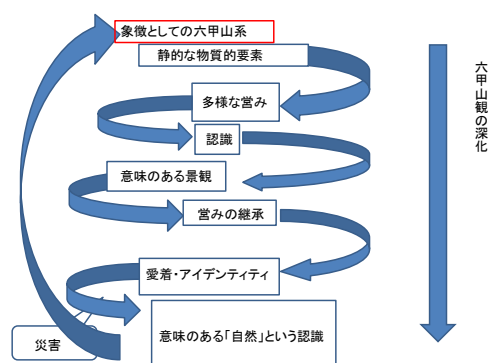
んなが住む山⁵」としての場の創造を期待していることが明らかになった。

またそれぞれの場所において形成されるそれぞれの六甲山観は、「帰属意識」としての共通認識と具体的な営みによってもたらされる「神戸の象徴」としての共通認識をもたらししていることも明らかになった。

聞き取り調査では「共存」という言葉を意識的に使用する人々が多く、その理由に阪神大震災が挙げられた。また彼らの言葉に表出する「自然」という言葉は、六甲山系という「自然」の延長線上に位置づけられていることから、具体的・親和的な六甲山系とのかかわりの延長線上に、自然現象も含めた「自然」のかたちをイメージしていると考えられる。

8. 六甲山観の深化プロセスと「共存」イメージ

それぞれの六甲山観の深化のプロセスは以下のようにして、表すことができる。



「物質的要素」である六甲山系の存在から始まり、「さまざまな営み」が行われる。その営みは、日常⇄異日常の往来・「住む」場のなかに生まれ多様性を育む。六甲山系

⁵ 矢野氏聞き取り：2013年11月28日

は、営みの多様性が生まれる生活の場としての特有の場所性を有し、それぞれの場所によって行われる多様な「営み」によって、六甲山系というものの存在を「認識」する。その「認識」が、「物資的要素」であった六甲山系を「意味のある景観」に変化させる。その「意味のある景観」は、六甲山への関心の源泉となり、再び営みの多様性を育む。「意味のある景観」のなかで行われるさまざまな営みが、さまざまなかたちで「継承」されていく。触れ合いのなかで無意識的に「継承」の担い手になっていることや担い手が育っている実感を通じて、六甲山系に対する愛着が生まれていく。その愛着が、六甲山系に場所のアイデンティティを確立させ、また自らも帰属意識のなかに六甲山系を位置づけていく。そのようなプロセスを経て、六甲山系が「意味のある自然」として認識されていくのである。

また「共存」のイメージは、親和的ではない震災という出来事を「ネガティブ要素」として捉えるのではなく、「自然との付き合い方の知恵⁶」という恩恵に変換して認識することで、六甲山系と自然現象を含めた「自然」との融合を図っている結果と考えられる。

「公園緑地」ではない「自然」の意味は、六甲山系そのものの場の確保（保護）に妥当性を与えることができる。また六甲山系を人の活動から隔離したかたちではなく、今までの六甲山系を創りあげてきた人々と同様にかかわりの場として、総合的に捉え続けることが重要である。

また「共生」という言葉がもつ「自然」

との親和性と「共存」という言葉がもつ心理的距離感は、同じ土俵で対比されるものではなく、場における経験や多様なかかわりが具体的にもたらす「態度」としての表現手法なのである。

9. 六甲山系の価値

六甲山系におけるこの文化形成の土台になっているのは、グループが持ち込んだ「新しい山の遊び」だろう。より「楽しみ」を重視した「遊び」の導入によって、六甲山系の意味づけが周辺住民によって具体的に行われてきた。またそれが「誇るべき景観」としての地位を獲得する起点にもなってきた。そして、多様な「遊び」や「仕事」、「住む」ことを通じて、次世代にさまざまな手段で継承される素地を築いてきたのである。この「文化形成」が、多角的に行われることによって、六甲山系は周辺住民のアイデンティティとなってきたのである。以上から、六甲山系は、人間の活動や経験の意味づけによって社会的に理解されてきたものであり、六甲山系は周辺住民にとって、観念的ではなく、具体的・身体的かかわりをもって理解され、意味づけされてきた自然的環境であるといえる。

10. 参考文献

エドワード・レルフ1999『場所の現象学—没場所性を超えて』筑摩書房、鬼頭秀一1996『自然保護を問い直す』筑摩書房、鬼頭秀一/福永真弓（編）2008『環境倫理学』東京大学出版、菅豊2006『川は誰のものか—一人と環境の民俗学』吉川弘文館、嘉田由紀子ほか（編）2000『共感する環境学』ミルネヴァ書房

⁶ 朝戸吉照氏聞き取り：2014年1月2日